

令和5年度富山県文化審議会（第1回）

日時：令和5年5月15日（月）

11時00分～12時00分

場所：富山県民会館 401号室

■議事

「新世紀とやま文化振興計画（平成30年改定版）」に係る後期重点施策の策定（答申案）について

【会長】

本日は、過去3回にわたりご意見をいただいた、「新世紀とやま文化振興計画」に係る後期重点施策の策定について、答申案をご審議いただく。

はじめに、事務局から「新世紀とやま文化振興計画」に係る後期重点施策の策定（答申案）について説明いただき、その後、委員の皆様からご意見、ご提案をいただきたい。

<事務局説明>

【会長】

ただいま事務局から説明があった答申案には、前回までご審議いただいた中間報告案に、皆様からのご意見等をふまえ、具体的な取組みや用語注釈が追加されている。

また、国の文化芸術推進基本計画なども十分ふまえたうえで、新たな4年間の方針を記載いただいていると考えている。

委員の皆様には、この答申案全般についてご意見を伺いたい。

【〇〇委員】

私が、いつも富山県について感心しているのは、例えば、利賀で国際的に名声のある芸術、演劇活動が行われる一方で、県民の生活文化の中でも、富山県芸術文化協会の活動など、文化的な活動が広く行き届いており、両方の面で大変充実していることである。日本の中でも珍しいほど充実した地域ではないかと思う。

しかしながら、これだけ充実しているにもかかわらず、富山県の外部に文化活動の充実ぶりがあまり伝わっていないことが、もったいないといつも感じている。

富山県は、ポテンシャルは非常にあるし、実際に成功している部分もあるが、発信力が少し足りないため、交流人口があまり増えないという状況ではないかと推察している。客観的な視点から、各レベルにおける各自の活動をもっと発信していけば、さらなる活動の充実や多くの方々を巻き込むことに繋がり、そして、交流人口の増加にも繋がると考えている。

【〇〇委員】

答申案では、文化を県民に浸透させる、あるいは、県民を参加させるという視点がプラスになったと同時に、魅力発信の点を強調いただいたことをうれしく感じている。

そのうえで、さらに発信していくためには、富山県にはどのような文化資源があるのか、文学資源があるのかということをもう少し掘り起こさないといけない。重点施策「I. 文化を創造・鑑賞・支援する人材の充実・育成」の中に包括されているのかもしれないが、私自身の反省の意味も込め、過去の様々な文化、文学資源を十分に研究、検証するような取組みが少し足りないのではないかと感じた。

【〇〇委員】

委員の意見を取り入れ、富山には文化的な資源が豊富にあるのに、それを広く周知できていないということに重点を置いた計画を立てていただき、ありがたく感じている。前回の会議でも、連携ということに触れ、例えば、県内に多くある文化施設の横の繋がりができれば、より富山県としての魅力を発信できるのではないかという話をした。

また、この計画からは、富山県は、伝統工芸に限らない工芸全般の分野に重点を置いているということがわかるし、本年は「とやまKOGEI 学生チャレンジプロジェクト事業」を実施すると聞いている。

ただ、工芸は、芸術の一分野ではあるものの、アイデアでどんどん進めていくというよりは、技術の鍛錬に時間を要する側面があるため、若手の人材育成を考えるならば、大学卒業後に制作を続けるハードルが非常に高いことを考慮してもらいたい。学生チャレンジプロジェクトのような支援や、大規模なアートプロジェクト、公募展で全国から作品を集めることもすばらしいことだとは思いますが、一方で、富山県が日本の工芸の中心になるという点においては、そのような取組みでは少し難しいのではないかと思う。

やはり、富山県で若い工芸作家が定着し制作ができるという状況が広く知られるようになれば、自然と制作のために富山県に人が集まるようになると思う。時間はかかるが、こうした環境づくりなど、ある意味非常に地道な取組みが必要だと考えている。

実際に富山で活動する若手工芸作家は結構な人数がおり、工芸作家どうしても、美術館と同じように横の連携ができれば、子どもたちに教える出前授業等の教育活動もできるだろうし、発表する機会が増えてくると、また富山県でやりたいと感じていただけることが、どんどん増えてくるのではないかと思う。

私は、実際に制作している若手の話を聞く機会もあるのだが、卒業してから本格的に活動を続けられるようになるまでの間の生活が、非常に苦しいという現実がある。そのため、選抜での助成制度などがあれば、少しでも富山に行って制作しようという考え方が根づいていき、それが段々と力になっていくと考えているので、また検討いただきたい。

【〇〇委員】

最近、県をはじめ各市町村で、文化財の保存活用計画の策定が行われている。最近の保存活用計画では、文化財の指定物件だけでなく、未指定物件も含めるようになり、分野も様々なものになってきているため、新たな発掘というのが大変重要となっている。

答申案には、文化財に関する本県の魅力発見についても記載がある。今まで、県民があまり気にしていなかったが、外部の人から見るとすばらしいと感じるものはたくさんあると思うので、

そうした新たな文化財の発掘が、指定、未指定関係なく、県下全域で行われるようになればよいと思う。

また、記載のあるモデルコースについては、確かに、単に点ではなくてやはり面で、県内の滞在期間を長くしていただくことが大切だと思う。

そのほか、子どもたちに小さい頃から、それぞれの地域に根差した獅子舞などの地域行事に参加してもらうことも大切とされている。現状では、各地域の祭りはあまりにも数が多く、実際の鑑賞者はごく一部の地域の人間に限られている。こうした祭りの情報発信は地域レベルでは難しいので、県を中心に各市町村などが取り組んでいくことも必要だ。

加えて、子どもも含めて、観光ボランティア的な方々が地域のことを知るといのは、地域の誇り、ひいては富山県の誇りに繋がるため大切である。重点施策Ⅰには「たてはく探検隊」というのも入っているが、小さな頃から、地域のすばらしい文化や、それぞれの地域の良さを、見て触れてもらうことが重要だ。観光ボランティアの育成により、地元の方が、人に説明する活動を通じて地域の魅力を見つめ直し、地域のすばらしさを改めて感じるということは、十分にあり得ることだと思う。

近年、井波はマスメディアでも話題となっているが、歴史的な町並みは、外国の方だけでなく国内の方にも人気があり、古い町並みの再生が全国的に行われている。最近では、井波に限らず県内の古い町並みをブラッシュアップし、若い方々、それも県外の方々が引っ越して喫茶店をやるなど活躍されている。先日、井波でクラウドファンディングを行ったところ、30分で1億円を超す資金が集まったという話も聞いている。再生してうまくいく事例があると、そこに投資する方も現れる。

富山県には、実は魅力がたくさんあると思うので、ぜひ良い方向に持っていけるとよい。

【〇〇委員】

施策の中に「子ども」という言葉がたくさん出てきているように、次代を担う子どもたちを育てるといふ大事な仕事の中では、子どもたちがどんな人と出会うのか、どんな場所に身を置き、どんな体験をするのかということが非常に大切だ。

私は、0歳の保育園児から、幼稚園児、小学生、中学生、高校生と接する機会があるが、年を重ねるとともに、感動の体験が、素直に表現できなくなっていくように感じ、寂しくなることがある。美術を志す高校生はいるものの、ご家族が、それでご飯食べていけるのかを気にされることで、生計を立てることと文化的活動とのギャップが非常に大きいと感じる。子どもたち自身でも、極端に言えば小学生のうちから、将来どうやってご飯食べていくかという話を親としているという話も聞いている。私自身は、子どもたちに「好きなことをやればいい」と話しているが、なかなか好きなことを見つけられない、また、好きなこと、趣味と生活は別という考え方があるようだ。

重点施策Ⅰには、「アーティストマッチング事業」だったり、文化部の指導者を外部から呼んでくるという話があったりするが、中学生、高校生は、大変感受性の豊かなときで、感化されやすい部分がすごくある。美術の評価は、主観的な部分があり難しいが、子どもたちに見せるうえでは、あまりにも平均的、インパクトのない作品も、逆に刺激が強すぎる作品もよくないように思われるし、また、作家としてはすばらしいが、教育者としてはどうかとを感じる方もおられる。県事業で人材を選抜するときの方法が気になった次第だ。

【〇〇委員】

富山県高等学校文化連盟では、文化部を中心とした文化活動の表現や、伝統文化の伝承、継承について積極的に取り組んでおり、文化や伝統を継承していくことと、生徒たちの創造的な活動を支援することは、学校における文化活動の大変重要な役割であると考えている。

今年度、鹿児島で開催される全国高等学校総合文化祭には、富山県を代表したくさんの生徒が参加予定であり、また富山県民会館では、県の高等学校文化祭も実施を予定している。この2つの文化祭を盛り上げていきたいと考えている。

昨年の全国高等学校総合文化祭では、県内の学校が、郷土芸能部門で最優秀賞・文部科学大臣賞を受賞した。県内の文化部が活躍しているということ、今回加筆いただいた文化部の魅力発信の部分で支援いただき、発信していきたい。

【〇〇委員】

旅行者、観光客の方に、県内の文化施設を訪れて、あるいは文化芸術に触れて、よかったとか、感動したなどと言っていただくと、やはり関係者や住民の方は、うれしくまた誇らしく感じると思う。

そういう意味で、文化観光というのは、単に入館料の増収といった経済面だけでなく、地域への誇りや愛着を育むという好循環をもたらすものであると考えている。文化、それから観光事業者の関係者間での理解を含め、連携を図ることが大事である。

【〇〇委員】

SCOTは、先日ハンガリーで開催された「シアター・オリンピックス」に参加したが、ヨーロッパでも、コロナ後、久しぶりに生で対面する大きなフェスティバルであり、皆が生のもにに触れることに飢えていたのだと感じた。舞台も非常に好評だった。また、今年の秋には、日本ASEAN友好協力50周年記念事業として、長年インドネシアと交流があることから、ジャカルタで日本の俳優が共演する舞台を行う予定である。

世界にいろいろと発信している立場としても、やはり芸術文化は、非常に長い時間がかかるものだと感じる。SCOTが、合掌造りと地域の魅力に惹かれて利賀に来たのは1976年のことであり、もう47年になる。演劇も工芸もだが、文化芸術が本当に成果を出していくのは、非常に時間がかかるもの。経済面の強化、集客強化が大切だと言われるが、そうではない魅力、すぐに経済に結びつくことはなくとも、地域の誇りになるなど経済的にはすぐ還元できない部分が、非常に重要だと考えている。やはり文化を考える時には、そうしたことが根本にあることを、いつも私たちも心に置いておかねばならないと思う。

【〇〇委員】

まず、コロナ禍と学校について、やはり様々な行事、イベントが中止となって、生の音楽や劇に触れるなど、自分自身がやったり観たりということも含め、子どもたちが芸術に触れ、成長する体験の機会が乏しくなったと感じる。反面、1人1台、PCが配布されたことで、遠くの地域、他県や他国の文化に触れる機会が増えたというのも事実である。5月8日でコロナの分類が5類になり、今後の活動は活発になっていくと思うが、そのまま戻せばいいのかどうか、ITの活用等コロナ禍を経て効率的になった部分もあるので、先生も含めて模索しているのが実情だと思う。祭りや伝統行事の再開についても、地区ごとに温度差があると肌で感じているところだ。

また、富山市では、全小中学校で、地域の方が子どもたちに自分たちの活動を伝える「コミュニティ・スクール」という取り組みを実施している。ただ、情報発信が弱く、なかなか地域の方に実際に学校に来てもらうところまでいかないようだ。しかし、地域には、各地域の文化を担っておられる方がたくさんいるので、そういう方達に子どもたちに伝えていただくことは大切だ。地元の方など外部から子どもたちに、文化を広め、知ってもらう、触れてもらうことができればよいと思うが、学校や地域では発信がなかなか難しいので、県、団体などでも行っていただくと地域の方も活用できるのではないか。

発信に関して、SNSは、いじめに繋がるなどの危険もある一方、情報発信にはとても向いており、ネガティブではなくポジティブに活用していきたい。子どもたちの方が何かを発信するアイデアを持っていると感じており、子どもたちも巻き込んで、地元や県が情報を発信することを考えてもよいと思う。

【〇〇委員】

食文化も重点施策に含めていただいたのはありがたいが、「郷土料理」に絞ってしまうと範囲が狭くなり、若い方にも発信するには、なかなかなじみにくい部分がある。例えば、先日閣議決定された内容に100年フードの認定があるが、富山の100年フードは「よごし」となっており、これを若い方々に普及させるのは難しいように感じた。

古いものから新しいものまで全体をとり入れた方がよい。利賀の演劇なども、いまや富山の文化になっているように、古い文化から新しい文化の食も取り入れ、富山といえば〇〇という何かを作ったり、経済活動と文化をかけあわせたりしながら、郷土料理を中心に様々な特産物など、富山の食文化全体を推進していくことが大事だと思う。

【〇〇委員】

最近、すべての県民のウェルビーイングとよく言われるが、文化に親しみ充実感を覚えたり、幸せを感じたりしたくても、実際には時間や余裕がなく、滞っている状況ではないか。県民に関心を持ってもらうため、メディアの力を利用するなど、美術館、展覧会やイベントの主催者等の発信努力が必要だと思う。

子どもたちが、芸術文化に親しみ、作品を作ったり観たりする機会を設けていただきたい。学校教育との連携、地域社会との連携ももちろん大切となるが、小さな頃から本物をみる実体験が必要である。中学生、高校生、大学生などは、教育カリキュラムの中でも、青少年の文化活動を支援していただけるのが望ましい。

先日、富山県民会館で開催された日展では、県内の小学生6年生全員に無料の特別券が配布されたとのことで、会場で子どもとお母さんが一緒に作品を観ている光景に出会いうれしくなった。小さな頃から良いものに触れ、いろいろなものにチャレンジし、理解を深めていくことが大切だ。

【〇〇委員】

今回の答申案の中には、いくつかの新しいキーワードが組み込まれており、文化振興も新しい時代を迎えつつあるように感じている。

これまで、国際会議や学会、コンベンションなど、いわゆるMICE誘致にも、文化の視点が重要だと話してきたが、アフターコロナにおいて、リアルコンベンションが大きく動き出している状況であり、選ばれる開催地としての富山の特別感、まさに文化の薫りの発信が大切と

なっている。また、美術館や文学館には、鑑賞だけではなく、ユニークベニューとしての文化施設の開放が求められていると感じる。一昨日まで富山で開催されたG7教育大臣会合で展開されたプログラムでは、まさにユニークな場所での伝統や食が組み込まれていたが、こうした文化体験が、富山の特別感を出すためには必要だと思った。

もう一点、文化を支える人材育成も大事にした答申案だと考えており、県民に近いところでは、様々な文化活動が期待できるが、経済界と文化事業の連携では、アートマネジメントの存在は非常に重要だと感じている。他県では、特別支援学校の優れたアートを企業等に対して、サブスクリプションで貸し出したり、企業がファッションや文具にアートを展開したりして、その収入が将来に向けた活動に生かされるという動きが出始めており、富山でも少しずつ同様の活動があると見聞きしている。これからは、企業と文化を結ぶ、仲介や企画ができる人材の活躍にも注目したい。

【〇〇委員】

観光も文化も、地元の方が行かないようでは、県外、あるいは外国の方は来ないだろう。地域のファンどう増やしていくかについては、先ほどの意見にもあったが、子どもを無料で入れるなどの取組みは有効ではないか。また、県内には様々な施設やホールがあるが、共通で使える割引券を県民に年に1枚でも3枚でも配るなどの方法も考えられる。

また、県内の複数のホールにおいて、今週末はどこで何が行われているか、あるいは事業者の立場では、どの施設の予約が埋まっており、どの施設なら予約できるかを、1つのホームページを見るだけでわかるような方法があればよいと感じる。利害関係もあり難しいとは思いますが、ホールと美術館の2本立てぐらいで、ホームページの集約をご検討いただきたい。

【〇〇委員】

文化振興計画の3つの重点施策については、人材育成、地域間の活性、そして文化振興という流れでわかりやすく、ブラッシュアップして良いものになったと思う。

消費者である県民の立場からすると、自ら文化を享受する、体験する、もしくは担い手になるのみならず、やはりボランティアとして関わるなど、様々な関わり方をすれば、富山の文化に誇りを持てる県民が増えていくのではないかと思う。

私の今までの経験でいうと、例えば、富山県民生涯学習カレッジの活動では、いろいろな文化財など様々な場所を訪問しているが、観光ボランティアの方々もレベルが高く、解説を聞いても納得することができた。

ボランティアのブラッシュアップも必要であるし、それだけでなく、学校教育、社会教育など様々なところで、文化活動が、数多くそして長く続いていけばよいと思う。